
守りたいモノ

試行錯誤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守りたいモノ

【Nコード】

N6054P

【作者名】

試行錯誤

【あらすじ】

「アスベル・ラント」はある日裏山に出かけ記憶喪失の少女に出会う。彼女に「ソフィ」という名前をつけ、記憶が戻るまで彼女を守ることを決意した。しかしソフィは自分たちを守るために死んでしまい、それがきっかけで誰かを守るために強くなりたいと思う気持ちが強まり、家出をして王都にある騎士学校に入り騎士になる……はずだった。

この小説は「アスベル」がくネギま>の世界に行くお話です。申し訳ないことに現在構想中のシナリオでいくとオリジナルの話を

いれるので原作に入るまで凄いかかりそうです。そのせいで純粹にクロスものを楽しみにしていた方には不快な思いをさせてしまうかもしれません。

初投稿の理系素人です。小説に対する、感想，アドバイス，文句を随時受付ています。

プロローグ（前書き）

土日暇だったんで勢いで創った。今は反省している。

プロローグ

――強くなりたかった――

自分は強いと思っていた。少なくとも自分の周りの人達ぐらいは守れるくらいに。

騎士になるために剣の訓練も毎日していたし、裏山に遊びに行く途中に出てくる魔物に遅れをとることなんかなかった。裏山で襲って来た王子様に剣を教えていた名門の騎士にも負けはしなかった。

――大切なモノを失わないために――

でもそれは自惚れだった。もっと早くに気付くべきだった。

魔物に負けなかったのは人見知りだけど頼りになる弟が隣に居てくれたから。

騎士に負けなかったのは変だけど面白くて強いアイツが隣に居てくれたから。

俺はアイツを守れない程弱いことに…

――今度こそ守ってみせるために――

今までは自分の小さな世界しか知らなかった。

この広い世界に比べたら：俺は……あまりにも無力で、馬鹿で、ちっぽけで……

あまりにも小さ過ぎて泣きたくなる。なら、泣いてしまえば楽になれるのかもしれない。

――だからこそ騎士になると決めた――

……でも……そんなはことできやしない。

自分の名前さえ覚えていなかった少女に報いるためにも俺は立ち止まってなんかいられない。

いつもボーっとしている変な奴だった：

俺達が考えて付けた名前を喜んでくれた：

隣に居てくれるだけで笑顔になれた：

戦いなんて全然似合わない奴

だからこそ、どんなことがあっても俺が守ってやると決めていた。

それなのにあの時の俺は守られているだけだった。

そして、アイツは俺達を守って死んでしまった。

アイツが俺達を守るために魔物と戦っていた後ろ姿を覚えている。

その後ろ姿に追いつくために：

強くなると誓った

プロローグ／グレイセス（前書き）

ただの思いつきなので過度な期待はしないでください。

「アスベルはクロスさせやすそうな設定なのにどうしてだれもやらないのだろう」と思い書きました。

今回の内容は

ぶっちゃけ

三行ですませられた。

次からクロスしますよ。

プロローグ／グレイセス

とても気持ちのいい陽気の中、穏やかな風を受けて一隻の船が海を渡っていく。

定期船の目的地はこの＜ウィンドル王国＞の王都＜バロニア＞である。

＜バロニア＞には当前、王の住む宮殿があり、そして王国の剣となり国を守る騎士を育成する騎士学校が存在する。王都ということだけのことはあり、この国の中では最も人が集まり賑わいを見せる都市である。何より＜ウィンドル＞の未来を想い、いざという時のために力を求めて各都市の若者が大量に住んでいるのだから、自然と商人も集まりどんどん発展していくのであろう。

そして＜バロニア＞には国の宝にして、観光の名所としても有名な大翠緑石がある。大翠緑石は明るい緑色をしており宝石のように美しい。大翠緑石とは「緑なすもの」と名を与えられた大輝石バルキネスクリアスで＜ウィンドル＞に生きる者に達に風の原素エレスを運ぶものである。

原素とは、この世界を形成するエネルギー、そして全ての生命の源。原素には＜風＞・＜水＞・＜火＞の三種類の属性が存在している。

そして輝石クリアスとはこの原素を内包している石である。大輝石は高さが10メートル以上はある巨大な一つの輝石である。

また、この原素を用いた輝術というものがある。輝術とは大きく分けると二種類存在する。

一つ目は、空气中に存在する原素を体内に取り込むことで身体能力を強化し気を消費して放つアーツ系輝術。

二つ目は、原素を体内には取り込み自身の原素と魔力とを共鳴させ増幅し炎や氷を形作らせて操り放つバースト系輝術である。

（最もその二種類を組み合わせて出す輝術があるため判断が難しい。

）
船の甲板にはこれから訪れる＜バロニア＞に期待を膨らませる者達の楽しそうな笑顔と会話があふれていた……一人の少年を除いて。

甲板の端にひとりの少年が居た。年齢はおそらく10歳ぐらい、一目で高級品であることがわかる緑のパーカーを着ており、少年の横には彼の持ち物であろうこれまた立派な装飾の鞘に収まった剣（もつとも今の彼には大きすぎであろう）が甲板の手すりに立て掛けられている。

その少年 アスベル・ラント は、ただ海を見つめていた。海を見つめる表情はとても遊びたい盛りの年頃であろう少年がするものではなく、その表情、なにより瞳には強い決意と覚悟を感じさせた。

：でも時折、今にも泣いてしまいそうな顔をする、しかし瞬きの間には元の決意と覚悟をもった表情に戻っている。おそらく泣きたい程の何かがあったのだろう、それでも泣くことをよしとせずそんな弱く後ろ向きな気持ちなんてものは強い意志でねじ伏せてしまっているのだろう。

少年や乗客を乗せた船は静かに目的地に向けて進んでいく。

だが、そんな時間を破る大きな悲鳴が響いた。

「キヤーツ！！」

そして悲鳴が起こった先を見て現状に気付いた者達の

「イヤーツ！！」

「うわぁー！！魔物だ！！」

「うっ、嘘だろ……なんでワイバーンがこんな所に居るんだ！！」
「ママー」

その瞬間、船の上は乗客たちの魔物に怯える悲鳴や、自分の知り合いの名前を叫ぶ声、我先にと甲板を走りすこしでも魔物から距離を離そうとする足音で一杯になった。

ワイバーン……本来は＜ストラタ共和国＞の砂漠に生息する竜の魔物である。平均的な成体と比べるとまだ小さいからまだ子供であろう。それならあまり強くないかもしれない……あくまでも成体よりは。こんな所に居る理由はもしかしたら子供心の好奇心で遠くへ来たのかもしれない……国を一つ越えて来るとはご苦労なことだが、長旅で空腹の様なので笑えない。

そのワイバーンは転んで逃げ遅れた5歳くらいの少女が居る甲板の中央付近に降り立ち少女を、まるで獲物を見つけたかの様に見える。……いや間違はなく、今この場で、この魔物は絶対的な強者である捕食者で、あの少女はただの弱い被食者だった。

捕食者は 発見 ↓ 捕捉 ↓ 喰う と段階を踏んで獲物狩る。
もうすでに発見・捕捉を終えたのだから、次の瞬間には小さな彼女は一飲みで喰われてしまうのだろう

少女はただ目の前の存在に恐怖し動くことも声を出すこともできず、少女の両親はただ目の前の現実を認めたくなくて泣き叫び、船の護衛はあまりにも想定外の魔物を相手に二の足を踏み、もしくは少女気遣い輝術を発動できないでいる、他の人はその残酷な光景に目を瞑り自分が狙われないことをただ祈っていた。

しかし、その人の流れに逆らい誰よりも速くワイバーンの死角へと廻った小さな影があった。

先ほどの少年、アスベルである。

「ばっかいしょう!!」

掛声と同時にワイバーンの後頭部に鞘に入ったままの剣を振り下ろす。

「グアッ!？」

どうやら、10歳ほどの少年の力とは思えないほど強力な一撃だったようだ。あのワイバーンが怯んでしまっている。

それもそのはず、アスベルの身体能力は、並みの人間よりもずば抜けて高く、また今の一撃は自身の力だけのものではなく原素を用いたアーツ系の輝術である。

その一撃の威力は地面を砕くほどの威力をもつ。

「早く!! その女の子を!!」

魔物の間合いから離脱しながらアスベルが大声で叫ぶ。

それが言い終わるか否かの間に、船の護衛の一人が急いで少女を抱き抱え魔物から距離をとり、残りの護衛達がそんな彼らの前に立ち塞がる。

ワイバーンが怯んでいた短い間にここまで動けるのは流石といったところか。

どうやら少女は両親のもとへと無事に帰れたようだ。三人が泣きながら抱き合っているのを横目に見つつ、アスベルは臨戦態勢を整える。

「礼を言うぞ、勇敢な少年よ!! 後は我々が引き受けるから下がつていなさい」

そう護衛のリーダーのような人が言った。

彼らは、不意打ちならともかく、あの少年が正面からあのワイバーンと戦うのは不可能だと思い、下がらせようとしたのだろう。なにより彼らはこのような時に身を呈して乗客を守るためにこの船に乗っているのだから。

しかし：

「嫌だ！！」

とアスベルは叫ぶ。

「なっ！？」

その発言に誰もが目を張る。

「それに、その魔物は俺のことを気に入ってくれたらしいぜ」

アスベルの言う通りワイバーンは彼のことさっきから血走った眼で睨んでいる。

どうやら食事の邪魔をされたことが相当頭にきているようだ。

その怒りを一身に浴びているアスベルの顔には冷汗が浮かんでいる。どんなに固い決意をしても恐怖心が消えてくれるわけではない。それでも彼は一步も引かないだけのこと。

「俺が囷になってそいつの注意を引き付けるから、隙について攻撃してください」

そう言われリーダーは考える、どうすれば被害を最小限にしてこの魔物を倒せるのか。

『……確かに、下手に攻撃を加えて魔物を刺激するよりは一度の攻撃で決めるべきか。…何より少年のあの目。人のスペックを軽く超

える存在を目の前にし、恐怖を感じながらもあれだけ強い輝きを放つなんて』

戦術的な考えもあったが、そんなことより少年のことを信じてみたいと思う

「無理はするな」
とだけ言った。

その言葉を合図に勢いよく突っ込んで来たワイバーンをアスベルは左にサイドステップすることで回避する。そのワイバーンの飛ぶ速さや質量からすると掠っただけでも大怪我を負うことだろう。しかし身軽なアスベルからしたら真っ直ぐに突っ込んで来るだけの攻撃はかわしやすい。その繰り返しを何回かしているうちにワイバーンが炎のブレスを吐こうとしたのか大きく息を吸い込んだ。

その隙を狙い

「はあ!!」

剣を首目掛けて大きく切り上げる。そして素早くその場から離れる。すると、ワイバーン向っていくつもの炎の塊が飛んで行き

ワイバーンに命中して爆発した。

爆発の煙が晴れて後に残ったのは甲板に倒れ伏した黒こげのワイバーンだった。

それを見たアスベルが叫んだ。

「俺達の勝ちだ!!」

「 「 「 やった〜!! 」 」 」 」

乗客や護衛の人達の歓声が響いた。

アスベルも皆とは離れた所に立ってはいたが、とても満ち足りた顔をしており嬉しさが伝わってくる。

「危ない!!」

「ガッ」

一瞬の油断。

目を覚ましたワイバーンが起き上がりアスベルに尾をたたきつけて空の彼方へ飛び去って行った。

「っ少年!!」

その声は誰のものだったのだろうか、でもそんなことは今のアスベルに関係ない。痛みでとびそうになる意識を必死に留める。しかし、彼の小さな体は簡単に船の外へと弾き飛ばされ、海中へと沈んでいった。

苦しい……………このまま溺れて死んでしまうのだろうか？

体中が痛くて…うまく動かせない……………それでもお気に入り
の剣を手放さない自分に少し苦笑する。

ほとんど動かない体を酷使し上を目指す。

それでも上に上がるどころか、どんどん沈んでいってしまう。

悔しい……………アイツに救われた命をこんなにも簡単に散らそうとする自分が腹立たしくて仕方ない。

でも……………もう……………いし……………きが……………

そんなとき、ふと、頭の中に声が聞こえた気がした

「大……………だ……………ベル……………るから」

それは、つい最近まで耳にしていた声だった

「大丈夫……………だよ……………ベル……………とは……………るから」

それは、守るって決めていたアイツの声だった

「大丈夫……………だよ……………ア……………ベル……………ことは私が……………るから」

それは、俺を守るために死んでいったアイツの声だった

「大丈夫だよ。アスベルのことは私が守るから」

そんなこと、あり得ないのに。

それは、花畑で出会った記憶喪失の少女、アイツ……………

ソフィ

の
声である気がした。

誰かに手を引かれる感覚を最後に俺の意識は途絶えた。

プロローグ／グレイセス（後書き）

はい〜〜、以上です。

アスベルが行くのは＜魔法先生ネギま！＞の世界を予定しています。でも、アスベルの青年期の服は＜ネギま＞の世界で普段着として着用したらちよつとあれなので「バリアジャケットってことにして戦闘時だけ着るようにすればいいんじゃないか」と思ったんだ、うん、ごめん。ちなみにデバイスは武器ではなく＜TOG＞の装備＜ホルダー＞のようになります。でも仮契約カードに衣装登録機能あるんだっけ。

そのあたりは構想中です。

まあ、＜リリカルなのは＞から来るとしたら三人です。展開も考えてあります。

ちなみにTOGのキャラはアスベル以外出ないですよ………たぶん……でもソ……だすかなあ。

自分はオリキャラがメインなのはあんまり好きではないというか、苦手なんで、

ないものは他所から持ってくる魔術師思考です。

いや、考えるのがだるいとかでなくてね、いや、ホント。

感想お待ちしてます。

あと＜リリカルなのは＞はいれなくていいとかの意見もお待ちします。

出会い（前書き）

パスカルが「リインフォース」や「少し、頭冷やそうか」って言うのは、狙っているのか。

出会い

人気のない雪の積もった森の中に10歳くらいの少年が倒れていた。どうやら気を失ってしまっている様だ。

少年は整った顔立ちをしており、髪の色は赤みがかった茶髪、服装は上に緑色のパーカーをはおりその下に珍しいデザインの深緑色の服を着て、鼠色の長ズボンを履いている。

隣にはこの少年の持ち物なのか鞆に収まった剣が落ちている。

少年―アスベル・ラント―が不意に意識を取り戻した。

上半身を持ち上げて、何かを探すように周りをきょろきょろと見回した。

周囲には誰もいない。

「犬の鳴き声と子供の泣き声が聞こえた気がしたけど……気のせいかな？」

独り言が静かな森に溶けていく。

「確か……俺は海に落ちたはずなんだけど……？」

アスベルが居るのは森の中なので、自分の最後の記憶と現状の違いに混乱しているのだろう。

それだけではなく、今居る場所はアスベルがかつて経験したことがないほど寒かった。

そのため、アスベルは腕で震える身体を抱くかのようにして、できるだけ体を温める。

何かを思い出したのか、アスベルは小刻みに震える自分の右手に視線を落とした。

……あの時に聞こえた声は確かにソフィの声だった。じゃあ、この手を掴んで俺を助けてくれたのはソフィなのか――？

そこまで考えるとアスベルは勢い良く立ち上がりもう一度辺りを

見渡した。

自分の近くには全く人の気配がない。

——もしかしたら、ソフィが生きていて自分の近くに居るのかもしれない——

それでも、そんなことを期待してしまい、アスベルは冷たい空気を大きく吸い込む。

「おーい！！ソフィィー！！」

自分の出せる限界の音量で叫んだ。

.....

.....

.....

：短くはない時間の間ソフィの名前を呼び続けたが、相変わらず人の気配がすることはなかった。それどころか、魔物が近づいて来る気配もない。

それでも、「もしかしたら」を信じたくて、落ちていた剣を掴み走り出そうとした時、アスベルは今まで自分が雪の上に倒れていたことに気付くのだった。

地面に降り積もっていた雪には、アスベルが付けた足跡以外はなく、アスベルには雪が積もっていなかった。

つまり、アスベルがここで目を覚ますまで、誰も彼の傍には近寄っていないということだ。

それが理解できてアスベルの足は止まり、顔は下を向く。

さっきまでの気持ち之急激に冷めていった。

「そんなこと：あるはず.....ないのにな：」

ぽつり、と誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

アスベルは目を閉じて長い吐息を吐く。

どうかしている……死んだはずのソフィが俺を助けてくれた、なんて思うとは――

確かに、アスベルはソフィの死を直接確認してはいない。だが、あの時、彼女は腹部を魔物に貫かれていた。

その怪我はどう考えても致命傷であり、すぐに治療することもできなかった。

そんな状態で生きていられるはずがない。

ソフィは確実にアスベル達を守って死んでしまった。

そうして、アスベルは頭を上げて前を見る。

アスベルの目指す道はもうとっくに決めているのだから。

大切なものを守るために強くなると。

「それにしても、何処なんだ……ここ？」

アスベルは気を失う前は、＜ウィンドル＞に居た。

しかし、今の時期、肌に刺すほど寒さが厳しくなるなんてことはなく、ましてや積もるほどの雪が降るなんてことはありえない。

「もしかして……＜フェンデル＞なのか？」

こんなに雪があるということは、＜ウィンドル＞と国境を争い、アスベルの父が領主を務める＜ラント＞に攻め込んで来る、極寒の国＜フェンデル＞であろうか。

そうだとしたらアスベル・ラントにとって、この地で他人……特に軍人と接触してしまうのは危険すぎる。

最も、この寒さのせいで常に体温を奪われ続けているため、このままここにすることも危険なのだが――。

海流に流されていつの間にかに流れ着いたのではとアスベルは思ったが、それでは森の中で寝ていた理由にはならない。しばらくの間、考え込み徐にアスベルは歩きだした。

考え込んでいるよりは行動している方が自分らしいと思ったのである。

もし、誰かと会ったとしても姓の方を名乗らなければいい、それ以上のことは思いつかない。…だいたい、頭を使うのは俺より弟のヒューバートの方が得意なんだし――

そんなことを考えながら、アスベルは慣れない雪道に足を取られ剣を杖代わりにしながら進み出した。

雪を掻き分けながら少し歩くとアスベルは森から抜けることができた。

歩いている途中で気付いたことだが、不思議なことに、アスベルの身体はワイバーンから受けたダメージがもうなくなっていた。

もし、ダメージがまだあるようなら、アスベルはアップルグミでも食べることはなっていたが、節約することができた。

この地では、いつ補給ができるかわからないので非常に助かった。途中、一度も魔物に遭うことがなく、慣れない足場での戦闘行為がなかったことは幸運であったといえる。……人と逢うこともなかったのだが。

森を抜けると目の前には綺麗な湖が広がるだけで人の住む土地を見つけることができなかった。

とりあえずはと、湖に沿って歩いて行った。

このままでは、雪道を歩いていくことによる体力的な疲労よりも、何処まで歩けばいいかわからないことによる精神的な疲労の方が辛くなっていく。

「んっ？」

湖の方をなんとなく眺めながら歩いていたアスベルが立ち止まり、目を凝らして遠くを見た。

少し先の湖の周りを赤くて小さい何かがチヨロチヨロと忙しく動き回っていた。

同じ景色ばかりでうんざりしてきていたアスベルはその生物？に興味を持ち早足でそちらの方へ向かった。

どうやら、あの赤くて小さい何かはおそらく5歳にも満たない小さな子供の様だ。

正直、まだまだ小さ過ぎて男の子か女の子かアスベルには判別ができなかった。

それでも、アスベルは安心することができた。

あんなに小さな子供が一人で来られる様な場所なのだから、近くには人が住んでいるのだろう――

そう考え、アスベルはその場所を尋ねようと思い、子供の方へ駆け足で近付いて行った。

「……………！」

そろそろ声を出して呼び掛けようかとした時、アスベルは驚きで目を見開き立ち止まった。

あの子供がアスベルの目の前でいきなり湖へ飛び込んだのだ。

「何やってんだアイツ！！」

悪態をつき、持っていた剣を放り投げて、アスベルは急いで湖に駆け寄って迷いなく水の中へ飛び込む。

湖の冷たさにアスベルの体温は一気に奪われる。

………そういや俺の身体、海に落ちたはずなのにほとんど濡れてなか

ったな――

そんなことを心中で呟き、水面でもがいている子供の方へ泳ぎだした。

アスベルが子供のもとへ泳ぎ着いた時、「お父さん」と子供が言っていたが、その言葉はアスベルには届かなかった。

湖で溺れていた子供をアスベルはなんとか岸へと運んだ後、子供の様態を確認する。

意識はないが呼吸はしている。

それを確認し、おそらくはこの子供のものではあろう雪原に残された足跡を目印に冷えきった子供を背負い歩きだす。

しかし、いくら子供とはいえ、衣類を身に着けた状態で、一人を引っ張っての水泳はアスベルの体力を大幅に削り取っていた。

そのため、足取りは鈍く思うように前に進めていない。

おまけに、衣類は濡れて重くなり、どんどん体温が奪われて今では凍りついてしまったのかと思うほど、全身が冷え切っていた。

「はぁ：はぁ：はぁ：……っ！？」

ふらりとアスベルの身体が傾き倒れてしまう。

アスベルの視界は歪み焦点が定められず、少し前までの冷たさが嘘の様に体は熱くなっていた。

倒れた態勢のまま背中にいる子供の様子を診る。

「はぁ：はぁ：」

目を覚ました様子はないが子供の息は荒い……どうやらこの子供も熱をだしてしまっているようだ。

このままではまずいと思い、アスベルはなんとか立ち上がり小高い丘をフラフラと登って行く。

必死の思いでその丘を登り切ると、アスベルは再び雪の上に倒れ込む。

もうすでに、彼の体力は限界だった。

丘の麓に人の住んでいる集落があった。

それを一瞬だけ確認してアスベルの視界は闇に染まっていった。

出会い（後書き）

これってクロスしたと言えるのかな

アスベルの装備

〔武器〕

アストンの剣（湖に放置中）

〔防具〕

カジュアルパーカー

〔固有〕

なし

感想お待ちしております。

現状とこれからと（前書き）

御都合主義ですみません

村の名前とおじさんの名前はTOSから取りました。

ルビを忘れていたので修正しました。

現状とこれからと

ココはドコ

白い空間だった

下を見る

下は湖面の様に静かに波打つ

立っているのか

浮かんでいるのか

飛んでいるのか

自分と空間との境界があやふやでよくわからない

右を見る

遠くに大きな木がある花畑

左を見る

遠くに赤い光に染まる枯れた大地

そこで、これはただの夢だと気が付いた

前には黒く渦巻く誰かが居る

なんて禍々しいのだろう

でも

ソレは道に迷い

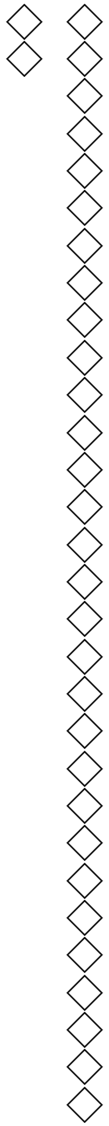
泣いてしまっている子供の様で

見ていると悲しくなる

なんとなく放ってはおけないと思い

気がつくと自分の手をソレに向かって差し出していた

そこで目が覚めた



「……ん……」

小さく声を漏らしながらアスベルは重い瞼を開けていく。

目を開けると、見慣れない天井が目に入った。

最初に考えるのは先ほどまで見ていた夢のこと。

しかし、変な夢を見ていたことは覚えているのだが、どんな夢だったかは覚えていない。

『まあ夢なんてそんなもんか……』

まどろみから覚めきれない頭でそう思い、アスベルは半身を起こして肺に溜まった息を吐き出しながら軽く伸びをした後、寝ぼけまなこで周囲に首を巡らせる。

部屋は木造で簡素な机と椅子が一组それと本棚。奥の方に暖炉があるだけの殺風景な部屋だった。

どこかの部屋のベッドで寝ていたようだ。

それに、着ている服も違うものになっている。

何で自分の服が変わっているのか、何でこんな所で寝ていたのかをアスベルは思い出せない……というより、記憶にない。

しかし、隣にあったベッドで眠っている赤い髪の小さな子供が視界に入ったとき、アスベルは湖での一件を思い出し、慌てて起き上がった子供の傍に近より様態を確かめる。

呼吸も安定していて熱もない。どうやら眠っているだけの様だ。

それがわかるとアスベルは気持を落ち着かせようと軽く息を吸って

吐く。

「なんじゃ、ぼーず目が覚めおったのかい」
と、後ろから声を掛けられた。

「異世界……？」

「うむ、おそらくは……じゃがの」

アスベルの話を一通り聞いた白いローブを身に纏い、白い帽子三角帽子をかぶった老人——スタンという名前らしい——はアスベルにそう告げた。

アスベルはスタンにまず名前を聞かれ、うっかり本名——アスベル・ラント——と名乗ってしまった。

アスベルは今、自分が居るのはくフェンデル>だと考えていたため『まずい!!』と焦ったが、相手はラントという姓にこれといった反応を示さずに「この村ではぼーずを見かけた覚えがないんじゃないが、何処から来たんじゃない？」などと聞いてきた。

少し拍子抜けしたアスベルだが、スタンの先の質問とこの質問で、自分の祖国である温暖な国<ウィンドル>と国境を争い、よく<ラント>に軍を進行させてくる極寒の国<フェンデル>では——ラントという姓に反応がなかったとはいえ——正直に答え過ぎてはいけ

ないと考えていたことを思い出したので、なんとか誤魔化そうとした。

「え…ええと…あの…その」

何も思いつかずにぶつぶつ言っていると、

「いや、それより前にあそこで寝ているぼーずを助けてくれた礼をまだ言っとらんかったわい」

そう言ってスタンがアスベルに頭を下げる。

「いえ、当たり前のことをしただけです」

アスベルはスタンにそう返事を返しながらも、心の中では『き…気付かれて…ない?』と呟き安堵していた。

アスベルは村の近くで子供——ネギ・スプリングフィールドという四歳の少年——を背負った状態で倒れていたらしい。

それを見つけた人が応援を呼びここまで運んでくれたそうだ。

アスベルはその人に感謝しながら、話題を今のうちに自分のことから遠ざけようと思い、

「そっそれより、ここは何処なんですか? 最初に目が覚めた時いきなり森の中にいたのでここが何処なのかわからないんです。まあ<フェンデル>の何処かだってことだけはわかってるんですけど」と、一気にまくしたてる。

「ぼーずは何を言っておるんじゃない、ここはウェールズにある山間の村オゼットじゃわい。<フェンデル>なんていう所ではないぞい」スタンに、名前を名乗ったのに「ぼーず」と呼ばれて少しムツとしたが、アスベルは<フェンデル>ではないという言葉聞いて混乱する。

ここが<フェンデル>でないことはアスベルにとって嬉しい誤算だ

ったが、スタンの言ったウェールズの村オゼットという地名があることを、少なくとも<ウインドル>では聞いたことがない。

『<ウインドル>にある地図にも載らないくらいの小さな村なのか？それとも……灼熱の国<ストラタ>なのか……でも寒いからそれはないか』

そう考えて、消去法から、

「なら、ここは<ウインドル王国>ですか？」

『それなら、バロニアへの行き方を聞いてすぐに向かおう』とか『そういえば、剣を湖に置いて来たなあ』など、気楽にもそんなことを考えながらアスベルは尋ねた。

「じゃから、ここはイギリスにあるウェールズの村オゼットじゃない。<ウインドル王国>なんて聞いたこともないわい」

スタンのその言葉でアスベルの思考はフリーズする。

目の前には、「何を言っているんだ」という顔をしてアスベルを見ている老人。

自分の顔は見えないが自分も同じような顔をしているんだろうなあ
とアスベルは思う。

それからアスベルは自分の知っていることを全部スタンに話した。

自分のこと。

世界のこと。

原素エレスのこと。

輝術のこと。

アスベルもスタンから色々聞いた。

この世界のこと。

マナのこと。

魔法のこと。

ムンドゥス・マギクス

魔法世界のこと。

それらを踏まえた上でスタンは、アスベルにこう言った。

「もしかしたら：ぼーずはこの世界と魔法世界とは別の異世界から来たのかもしれない。」

「でたらめ言うな！異世界だなんて、そんなことあるわけないだろ！！もしかして、俺がまだ子供だからからかってんのか！？」

目の前の老人にからかわれていると思ったアスベルは怒鳴っていた。

「だいたい、魔法使いなんてものは、ほうきで空を飛んだり、かぼちゃを馬車に変えたり、真実を言う鏡を作ったり、毒アップルグミを森のお姫様に送りつけたりとか、そういった物語の中だけの存在で、実際に居るわけではないだろ！」

スタンはため息をつき、アスベルの発言に対して「やけに具体的じゃの〜。というか毒アップルグミってなんじゃ？」などと呟きながらベッドの傍に移動させていた椅子から杖を片手に立ち上がる。

何をする気だと訝しん見ていたアスベルの目の前で老人は……宙に浮いた。

あまりの光景にアスベルは目を見開き言葉も出ない。

アスベルのあまりの驚き様にスタンも少し驚く。

「そんなに驚くほどのことかの？ ぼーずも輝術とやらのことは知っておるんじゃない？」

空中に今なお浮かび続ける老人の言葉を聞いて考える。

考えてはみるが、輝術（あまり詳しくない）で空に浮かぶ方法がわからない。

せいぜい、『風の原因でどうのこうのしたらいけるのかなあ』程度のことしか思いつかない。

必死に考えるアスベルを見ながらスタンは床に降り立った。

「ふむ。本当に魔法のことを知らないようじゃの。あれほど高価な魔法道具に高濃度のマナが結晶化し風の精霊の加護を受けたこの指輪、おまけに強力な封印が掛けられた剣を持っておっとたから、どこかの高位よりはるか上の魔法使いの子か弟子かという予想しておったが完全に外れたわい」

「なっ」

アスベルはスタンが何処からか出した指輪を見て奪い返そうとして飛びかかる。

しかし、ひらり、と老人とは思えない軽やかな動きでかわされてしまう。

「おい！ それはリチャードから借りた大切な指輪だ！！ 返せ！」

怒鳴りながら再び飛びかかろうと姿勢を低くする。

アスベルが床を蹴って飛びかかるより先にスタンが、

「別に盗ったりせんから落ち着かんかい」

言いながらアスベルに指輪を持つ手を差し出した。

アスベルはこんなにあっさり返されると思っていなかったため多少警戒しながら手を伸ばして指輪を受取った。

その指輪が本物だとわかった、さっきまでの怒りや焦りが嘘のような、穏やかな顔になっていった。

「そんなに大事な指輪なんかい？」

そんなアスベルの様子を見ていたスタンが訊く。

「ああ。これは俺の友達のリチャードから友情の証として渡された大事な指輪なんだ」

「そうか…その様な大切な物だったとは、申し訳ないことをしたわい」

スタンは頭を下げる。

「いいえ、こちらこそ助けて貰ったのに色々が無礼なことをしてすみませんでした」

スタンに謝られて急速に頭が冷めたアスベルも頭を下げて謝る。

改めて部屋を見ると隅の方にアスベルが湖に置いて来たはずの剣が置いてある…：わざわざ持ってきてくれたのだろう、それに騎士を目指すなら礼儀は大切だとアスベルは考えていた、それなのに自分がどんなことをしていたかを思い出すと益々頭の下がる思いになる。

相手は自分の話を聞いた上で自分が置かれている状況を説明してくれただけ。

相手は一時的に指輪を預かっていただけできちんと返してくれた。自分が飛びかからなくとも、あのまま渡してくれていただろう。

『…：なんだか俺が状況を理解できず、一人で勝手に怒っているだけみたいだ』

アスベルが自己嫌悪に陥ってしまっているのを横で見ていたスタンがどう言葉を掛けようか思索していると、

「あら、あなた目が覚めたのね」

「おや…そのようだね」

部屋に人が入ってきた。

部屋に入ってきたのはアスベルより二、三歳以上は年上だと推測できるネカネ・スプリングフィールドと三十代後半くらいの彼女の父親であるフランク・スプリングフィールドの二人だった。

自己紹介が済むとアスベルはネカネからお礼を言われた。

なんでも、ネギとネカネは血が繋がっているわけではないが姉弟の関係にあるらしい。

この二人にもアスベルがスタンにした話と同じ様なことを話し、スタンさんが言うにはと前置きして「俺は魔法世界とは別に存在する魔法使いも知らない異世界から来たのかもしれない……らしい」と説明する。

すると、この二人もそう考えるのが妥当だと言われてしまう。

それでも納得できないアスベルだったが、フランクの家にあるこの世界と魔法世界の地図、それにラジオや電話、テレビ、まして乗用車やバスといった全く見たことも聞いたこともない物を見せられると、自分が居るのは異世界かもと少しは信じるしかない。

「少しだけ信じるとは……これまた頑固なボーずじゃわい」

呆れた様にスタンがアスベルに言う。

「ムっ……世界は広いんだから、俺の知らない技術が何処かに在ってもおかしくはない……です。……あと、俺はボーずなんて名前じゃなくてアスベルです。」

アスベルがそう言うのとスタンが「お前くらいの子供は、ボーずで十分じゃわい」と返す。

それにアスベルが言い返そうとするが、

「もう、スタンさんもそんな言い方しなくてもいいじゃないですか」
話が進まないと思ったネカネが二人の話を遮る。

「そうですよ、スタンさん。……それで、アスベル君。君はこれか

らどうするつもりなんだい？」

フランクの言葉を聞いて、自身に問う。

——自分はどうするつもりだった——

＜バロニア＞行きたかった。

——そこで何がしたかった——

騎士学校に通って騎士になりたかった。

——騎士になって何を為したかった——

今度こそ守ってみせたかった。

弟を

友達を

両親を

知り合いを

名前も知らない誰かを

守りたかった。

そこまで考えてアスベルはようやく理解できた。

自分は異世界に居ることを信じられないのではなくて、ただ、認め
たくなかったということに。

アスベルにとって強さの象徴とは騎士のこと。

騎士になることで強くなり、誰かを守る。

それがアスベルの目標だった。

そのために船に乗り＜バロニア＞に向かった。

それなのに、今、自分が居るのは異世界。

つまり、＜バロニア＞には行けないということ

つまり、騎士には成れないということ

つまり、自分が求めていた強さを手に入れられないということ

つまり……それは……誰も、何も、守ることができないということ

本当はわかっていた。

自分が居るのは自分がよく知る世界ではないことを。

それを、認めたくなかった。

ただそれだけ。

『自分の世界に帰れない』

弟のヒューバートに会えない

幼馴染のシェリアに会えない

友達のリチャードに会えない

いつか見返してやると思っていた親父に会うことができない

その事実がこんなにも胸を苦しめる。

………いや…待て………何で諦めようとしているんだ……

この人達は俺が居た世界を知らないと言っていた。

彼らが知らないのなら、それは存在しないものなのだろうか。

いや、そんなことはないだろう。

さっき、自分で言った。

「世界は広いんだから、俺の知らない技術が何処かに在ってもおかしくはない」

つまりはそういうことなのだろう。

彼らは俺が居た世界そのものを知らない。

そのため、彼らが俺の世界とこの世界との間を行き来する方法がわからないと言うのは当然のこと。

でも、今俺がここに居るのだから行き来は何らかの方法でできるはずだ。

「何だ。簡単なことじゃなんかよ」

誰も知らないのなら俺が見つければいい。

考えてみたらこの世界にも気を扱う技術（聞いた感じ元の世界より優れている）があり、それに加えて魔法という御伽話中のものが実在しているんだ。

例え、騎士学校に通えず正式な騎士に成れないとしても、騎士を目指す気持ちにはなんら変わりはない、むしろ俺の世界にはないこの世界の戦闘技術を覚えられれば俺はもっと強くなれる。

それに、いきなり現れた身元不明の俺の言うことを信じてくれる人が居るんだ。

ここでもやっていけるはずさ。

俺のすることは決まった。

S i d e o u t

「お願いがあります」

俯いて考え込んでいたアスベルが姿勢を正して言う。

三人はそのアスベルの顔を見て驚く。

それも当然だ。

アスベルはフランクに「これからどうするのか」と訊かると、俯いて考え込んでいた。

その時の彼の表情には追い求めていた目標に絶対たどり着けないと思う失意の感情がありありと表れていた。

気軽に訊いたフランクは焦り、他の二人もどう話し掛けていいかわからずにいた。

そう、先刻まではそんな表情をしていたのに、今の彼の顔にはそんな暗い影がどこにもない。

それどころか彼の眼に現れている強い意志に圧倒されてしまう。

アスベル「ああ、いいぜ。この赤くて小さいのはアップルグミってやつなんだ。名前の通り、りんごの味がするんだ。これを食べると、傷が普通より何倍も速く治るようになるし、体力も回復する。旅の必需品で、どこの街の道具屋でも、どのかめにんでも売ってるな」

スタン「ほう。これほどのアイテムが必需品とは……驚きじゃわい」

アスベル「そうなのk……ですか？ちなみにアップルグミはグミの中でも一番安いやつです。アップルグミの上にピーチグミやグレープグミがあります」

フランク「へえ。グミはその三種類だけなのかい？」

ネカネ「（あれ？かめにんに対してはスルーなのかしら）」

アスベル「俺が見たことがあるのはその三種類だけです。でも、伝説ではオレンジグミやパイングミ、マグログミとかいうのがあるって弟のヒューバートが言っていました」

ネカネ「オレンジやパインはわかるけど……マ……マグロ？マグロってあれよね、さk」

フランク「で……では……！このアップルグミはいくら位で取引されるものなんだい？」

アスベル「100ガルドです」

三人「……………」

アスベル「？」

スタン「それはばーずの世界ではどのくらいの額なんじゃない？」

アスベル「？。100ガルドは偶に道端で拾えるくらいの額だけだ」

三人「……………」

アスベル「？」

ネカネ「な…なら…こっちの瓢箪みたいな形のものは何なのかしら？」

アスベル「ん。それはパナシアボトル。熱毒やマヒに石化といった状態異常を飲んだり、掛けたりすると直してくれる薬だな。あと、それも100ガルドだ」

三人「……………」

アスベル「なあ、さっきから様子がおかしいぞ…ですよ？」

スタン「いや…何でもないわい。」

フランク「じゃあ…………こっちのビンのやつはなんだい？も…もしかして最高級の魔法薬イクシールだったりするかい？」

アスベル「イクシール？…ああエリクシールのことですか？いいや、それはそんなすごいやつじゃないですよ」

フランク「そっ…………そうだね！」

アスベル「それはライフボトルといって瀕死の状態か、それに近い最悪の状態……まあ言い方が悪いとは思うけど、死ぬ一歩手前の人にしか効果がないんですよ。それを飲ませると、死ぬ一歩手前の状態からある程度は回復することができます。でも後の治療をしつかりしないとまた元の状態へ戻ってしまいます。その効果の性質上、一人でいるときに持っていたら、なんの意味もないアイテムですね」

三人「……………」

アスベル「ちなみに、これは300ガルドです」

三人「……………」

アスベル「？」

現状とこれからと（後書き）

やりたい展開がありすぎて迷う。

マイソロやってたらテイルズオブシリーズから誰か出したくなったので最低二人は出すと決めました。
名前だけの出演で話には全く関わらないかもですけど。

〽今後の展開（候補）

？テイルズオブシリーズから結構出す

？ネギま勢だけでやっていく（上に書いた最低二人は出す）

小説や今後の展開に対する意見・感想があればお願いします。

「なのは」からはどうしようかな

ぶっちゃけた話来るとしたら…みんな大好き「クロノ君」ですね。

「ネギま」は男が少ないから出したくなる。

ボロボロの日記帳

○月○日 晴れ

僕が起きると僕を助けてくれたお兄ちゃんが起きていて、お姉ちゃん達とお話してました。

お兄ちゃんはずばらくの間お家に帰れないそうです。だから、その間は僕と一緒にこのおじさん家の離れで暮らしてくれるそうです。

こんなに広い部屋に一人でいるのは寂しかったのでとても嬉しいです。

お兄ちゃんは「これから一緒に住むんだから、俺のこと兄貴って呼んでいいぜ」って言うてくれました。

そうするとお姉ちゃんも「じゃあ、アスベル君も私のことお姉ちゃんって呼んでいいのよ」ってお兄ちゃんに言いました。

お兄ちゃんが「なら ネカネ姉貴って呼ブッ!!」まで言ったらお姉ちゃんに肩を掴まれて「お・ね・え・ちゃ・ん」と笑顔で言われてました。怖かったです。

お願いしてお兄ちゃんと一緒にベッドで寝ることになりました。

寝る前に「お兄ちゃんは僕のピンチを救ってくれたからお父さんと同じスーパーマンなの」って訊くと「ちょっと前までは正義の味方とか言うってたけど、とりあえず今はネギの兄貴なんだからネギの味方だな」って言うてくれました。

僕が「「どんなときも？」って訊いたら「ネギが悪いことしたらこうやって叱るけどな」って言うて僕のほっぺたを引っ張ってききました。

すごく痛かったんで僕は悪いことはしたくないと思いました。

○月？日　晴れ↓雪

お兄ちゃんも僕も元気になったので二人で村を見て回りました。

お兄ちゃんはすごく明るいので初めて会った人としても、すぐに仲良しさんになれるのですごくいいなあと思いました。

村の人もお兄ちゃんのことをすごく気に入ったみたいでした。

お兄ちゃんは「この村で剣を使える人が居れば剣術の稽古をつけて欲しいです。あと、気の使い方と魔法も教えてもらいたいです」と頼んでいたけど、ここは魔法使いの村だから剣や気を使う人はほとんどいませんでした。

でも、おじさんのお家の正面に住んでいるミリーさんのパートナー（本契約者）のディックさんは魔法の剣を使って戦うらしいので、ミリーさんに頼んで紹介して貰うことになりました。

ミリーさんとお兄ちゃんと僕の三人でディックさんの所をお願いに行ったけど、ディックさんはそのお願いを断りました。

更に、お兄ちゃんのことを「何処から来たかもわからない信用できない奴」と言って、千の呪文の男―サウザンド・マスターの息子である僕と一緒に暮らすべきではないとひどいことを言いました。

この物言いにはミリーさんと僕が反論したけど、お兄ちゃんが「ディックさんの言うとおりだ」と言って「いきなり押しかけてすみませんでした」と謝り、今日はお家に帰ることになりました。

帰り際にミリーさんがディックさんのことを説得してみると言うてくれました。

お兄ちゃんは「一度断られたくらいでは諦めない。また明日にお願いに行く」と言っていました。

？月△日 晴れ

昨日は一か月ぶりに村に来てくれたお姉ちゃんとアーニヤが学校のあるメルディアナに帰ってしまいました。

前は、お姉ちゃんがなくなるのは、すごく寂しくなって嫌だったけど、今はお兄ちゃんが居てくれるので大丈夫です。でも、やっぱり少しだけ寂しいです。

アーニヤとお兄ちゃんは初対面だったけど、アーニヤ達が帰る時にはとても仲良くなっていました。

それに、最初は「アスベルさん」と呼んでいたアーニヤだけど、帰る時には「アスベルお兄ちゃん」と呼ぶようになっていました。

今日は村に魔法世界から商人さんが来ていました。

お兄ちゃんはその商人さんの護衛として付いて来ていたクラトス・アウリオンさんに剣の稽古をつけて貰おうと頼み込んでいました。クラトスさんは年が二十代半ばくらいで、髪の色は鳶色、でもすごく険しい眼をしていたので僕は怖くて話しかけられませんでした。

お兄ちゃんがお家に帰ってくると「クラトスさんが村に滞在している間は稽古をつけて貰えるようになった」と喜んでいました。

お兄ちゃんは魔法の適性がほとんどないので、気を使える人と出会えたことがすごく嬉しそうでした。

？月□日 雪

今日、お兄ちゃんがディックさんとの稽古に出かける前に僕はお父さんのことはよく話すけど、お母さんのことは何も話さないと言われました。

そういえば、前におじさんにお母さんのことを訊いたことがあったけど、結局話して貰えませんでした。

今度お姉ちゃんが来た時に訊いてみよう。

■月◆日 晴れ

最近は気温がどんどん暖かくなってきたので、そろそろ春になるんだなぁと実感できます。

今日はお兄ちゃんと村の近くの湖でお魚釣りをしていました。

お兄ちゃんの竿にはとても大きなお魚が掛かりました。

だけど、お魚を引き上げている途中でお兄ちゃんが持っていた竿が折れてしまいました。

お兄ちゃんは「明日こそ釣り上げてやる」と勢いよくお魚に挑戦状をたたきつけていました。

でも、「明日は一月ぶりにお姉ちゃんがこの村に来てくれる日だから村で待ってしよう」とお兄ちゃんに言ったけど、結局お姉ちゃんが来る時間までは湖でお魚釣りをすることになりました。ごめんなさいお姉ちゃん。

明日は、お姉ちゃんから僕のお母さんのことを聞きたいです。
早く明日にならないかなあ♪

※これ以上先のページには何も書かれていない。

ボロボロの日記帳（後書き）

すみません。

日記の内容を一話一話作ろうと思っていました。

しかし、それでは少年時代編終了まで、あと8話はかかりそうだったのでこんな形になりました。

そのあとにはアスベルの修行編を5話以上は書こうとしていたんですが、「長すぎるだろ」と思いやめました。いつか外伝的な感じで書きたいと思います。

次回からは、すでにネギが麻帆良に教師として来ています。

人物紹介

ミリー…この村出身の魔法使い。魔法世界に行っていた。ディックと恋に落ち、身

籠ったため村に戻って来た。

ディック…ミリーのパートナー。魔法世界出身の魔法剣士。アスベルのことを最初

の頃は警戒していたが、アスベルが毎日「剣の稽古をつけて欲しい」と

頼みに来るので少しくらいはいいかと思ひ稽古をつけるようになった。

今では二人の仲は良好です。

しかし、彼の剣技は魔法に依存したものが多く、純粹な剣術はアスベル

の方が上だった。

クラトス・アウリオン…TOSで登場。魔法世界のイセリア村に住み傭兵を生業とし

ている魔法剣士。

きなキャラ。

いう設定。

には、彼を師匠

が魔法世界に行

作者がテイルズオブシリーズの中で一番好

TOSの世界ではなく、並行世界の存在と

アスベルの性格をゲーム本編のようにする

にするのがいいかなと思いました。

今後の登場予定は未定（出るとしてもネギ

ってから）です。

夜の森にて（前書き）

予定より長くなったため途中で投稿……地の文が多すぎるのかな
アスベルは出ません

戦闘が終わるところまで進めたかった。

夜の森にて

——麻帆良学園——

幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできている日本最大の学園都市。

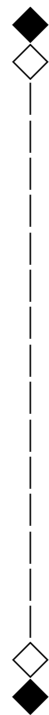
しかし、それは表向きの顔だ。麻帆良学園の裏の顔は関東の魔法使いたちを取り仕切る関東魔法協会の総本山である。

そのため、学園には学園内の魔法関係者、そして学園内に保管されている希少価値の高い魔法道具^{マジックアイテム}、なによりそれに巻き込まれてしまいかもしれない、一般人を外部からの侵入者から守るために常時結界が張られている。

よしんば、結界を越えて学園内への侵入に成功したとしても絶対に警備網に引っかかり、直ちに優秀な魔法先生と魔法生徒で構成された警備員に捕縛、もしくは撃退されることだろう。

そんな麻帆良学園にある森の中、夜の暗闇に包まれた木々の間を縫うように進む一つの影があった。

時折、雲から出てくる満月の月明かりが森に射し込み、その姿を照らす但那その姿は月明かりの中であっても影のままだった。



本当に大丈夫だろうか？

それが、麻帆良学園本校女子中等部の制服に身を纏い、その手には小柄な体形には長すぎる野太刀を持つ少女——桜咲刹那——の正直な気持ちであった。

現在、麻帆良学園は西洋魔術師と思われる術者が召喚した異形たちに攻められている。

刹那としては、すぐにも戦闘が行われている反対側の森に行き、戦列に加わりたいたのだが、思ったより異形の数も少なく、囿である可能性もあるため待機を命じられたためにあらかじめ配置されていたこの場所に留まっている。

なにより、向こうには学園はおろか世界でさえ通用する指折りの実力者である高畑・T・タカミチ、それにガンドルフィーニや刹那の剣術の師である葛葉刀子がいるので、異形が全滅させられるのも時間の問題だ。

彼女の周りにも同じように待機を命じられた高音・D・グッドマンや佐倉愛衣をはじめとした魔法生徒がいる、今日のように仕事を刹那と共にすることがある、実力者の龍宮真名も姿は見えないが彼

女も何処かで警戒を行っているのだろう。

それならば、先の襲撃を利用した囹を警戒している方がいい。

刹那の心配の先は現在こちら側の森にいる、唯一の魔法先生で彼女の担任でもあるネギ・スプリングフィールドに向けられたものであった。

ネギ・スプリングフィールドは魔法学校を首席で卒業し、今年の二月上旬に刹那の通う麻帆良学園本校女子中等部に教育実習生として修業に来た数えで十歳の見習い魔法使いだ。

今年の春からは正式な教師となり3－Aの担任を続けることが決まっている。

しかし、いくら首席卒業で、正式な教師となるといっても、彼はまだまだ未熟な子供であるため本来は警備員として働くことはないはずであるのだが、本人の「実践の経験を積みたい」という熱心な希望により、こうして春休みの間限定で臨時の警備員として働くことになったらしい。

刹那はその「本人が強く希望した」ということに疑問を覚える。

刹那のネギに対する人物評価は好奇心が強く真面目で、年の割にはしっかりしているが、不測の事態に直面するとあわあわ言って年相応に戻るといった感じである。……もっとも、あの2－Aの騒動に巻き込まれたのであれば誰でも慌てふためいてしまうだろうが。

ほとんど話したことがなく、普段はネギが刹那の護衛対象（近衛木乃香）と共にいるときに、遠くから見ているぐらいで、今日も初めにした挨拶だけで会話と呼べるようなことはしていないため、彼

に対してはその程度のことしか知らない。

だが、警備員に自ら志願するほどに好戦的な性格だとは思えなかった。

本当に、ネギがこの年から戦闘中毒バトルジャンキーの気があるようなら、彼の今後の人生を少し心配するとともに、そんな彼が木乃香と仲が良いということだけではなく、同じ部屋で暮らしていることに大きな不安を感じるのだった。

交替でしていた休憩の番がネギと刹那に回ってきた。

刹那は都合がよいと考え、ネギと直接会話をし、ネギの人となりを見極めようと思い、刹那はネギに近づいていく。

「ネギ先生。 少しよろしいでしょうか？」

そう呼びかけてみるが、ネギは聞こえていないのか目を閉じたまままで反応がない。

「ネギ先生」

仕方ないので、先ほどより大きな声で呼びかけると、

「ひゃい!？」

「!!!」

想像以上に驚き、あたふたしだしたネギに刹那は少し引く。

どうやってネギを落ち着かせようか悩んでいた刹那だが、彼女の

顔を認めたネギが自分で落ち着きを取り戻す。

「あ　桜咲さん。　どうしたんですか？　僕に何か用でしょうか？」

自分の慌てる様を見られたのが恥ずかしいのか、顔をりんごのように赤く俯き気味に刹那に話しかける。

「はい。ネギ先生は私の担任なのですがほとんど話しをしたことがなかったので、話しかけてみたのですが……　すみません、邪魔をしてしまいましたか？」

ネギは目を閉じて何かに声が聞こえなくなるほど集中していた。

ネギが魔法使いであることを考慮すると休憩中なのに索敵の魔法を使用し、集中していたところに話しかけてしまったのかと刹那は当たりを付け、その邪魔をしてしまったようなので頭を下げると、

「いえ　そんなことはありません。　僕も桜咲さんとお話ができて嬉しいです!!」

刹那の言葉すぐに否定し、ネギが刹那に笑顔を見せて話しかけてもらった嬉しさを表現する。

それに、と前置きをして、

「僕は夜目が利かないので、索敵の魔法に集中していたのですが……声が聞こえなくなってしまうほど集中してしまうようじゃ、全然駄目ですね」

刹那の声が聞こえていなかったのは全面的に自分が悪いと伝える。

確かに、周囲の声が聞こえなくなるようでは、警備員としては失格だろうとネギは自分の言葉に落ち込んでいくのだった。

「し、仕方ありませんよ。ネギ先生は今日が警備員としての初仕事だと聞いております。むしろ、そういったことにすぐ気がつくだけでも、今は十分合格だと思いますので、そんなに気を落とさずともよろしいかと」

その様子を見ていた刹那が自分が初めて警備員として働いた日のことを思い出しながら、刹那は落ち込むネギに慌ててフォローをいれるのだった。

「どうして、僕が警備員に志願したのか ですか？」

「はい。ネギ先生は正式な先生になったといっても、まだ、守られるべき子供であることに変わりはありません。それに、ネギ先生が戦いを好むような方にも思えませんので、少し気になりました。よろしかったらお答え願えないでしょうか？」

刹那はしばらくの間ネギと話して、やはり真面目な少年だと感じ

た。戦いを好むような性格とは到底思えなかった。なら、どうして警備員に志願したのかを直接聞いてみようと思ひ尋ねたのだった。

「そうですね 確かに僕は戦うことが面白いなんて思ったことはありません。……でも僕には追いて隣に立ちたい人たちがいるんです」

何か眩しいものでも見ているかのような眼をしながらネギは言った。

「追いつきたい人……ですか？」

「はい。 僕の父さんとお兄ちゃんです」

「ネギ先生のお父さん……とお兄さん？」

ネギの言葉に刹那は疑問を覚える。

ネギの父親——ナギ・スプリングフィールド——二十年前に魔法世界で起こった戦争を終結へと導いた英雄。彼のことは日本から出たことのない刹那でも知っている。

それだけではなく、刹那が以前所属していた関西呪術協会の長はその英雄の仲間として戦っていたのだから知らないはずがない。むしろ彼のことを知らない魔法関係者を探す方が苦労することだろう。

それくらい有名な人間だ。

しかし、ナギ・スプリングフィールドの息子は、ネギの一人だけと長と学園長からは聞いている。

だから、ネギのお兄さんとは一体誰のことだろうかと思う。

「あ お兄ちゃんといっても血が繋がった兄弟ではないですよ」

「え！？ あ そ そうですか」

刹那の声には出していない疑問にネギが答えたので顔に出ていたのかと焦ってしまう。

「でも、僕にとっては血が繋がっていなくなっただけで本当のお兄ちゃんなんです」

にこにこ笑いながらネギが言う。

その笑顔を見るだけでもネギがどれほど兄のことが好きなのかわかる。

ネギは兄との昔話を本当に楽しそうに話してくれた。

兄に強制的に連れられて一緒に村や山を駆け回ったこと

悪いことをするとほったてを引っ張られたこと

高畑・T・タカミチに付ける渾名を一緒に考えたこと

兄が魔法世界に行く前日にこねて大泣きしていたネギと兄弟の誓いをしてくれたこと

ネギは心の底からの最高の笑顔で話してくれる。

だけど、ネギの笑顔を見ていると、刹那は少しだけ……いや……本当はすごく羨ましくて、

『私にはそんな兄妹……家族すらいやしない』

つい、そんなことを考えてしまった。

「桜咲さん？」

「はい!？」

少しの間、別なことを考えていた刹那は名前を呼ばれ、ハッと
してネギを見る。

『しまった。自分から訊いておいて、話を聞いていなかったなんて』
そう思っていたのだがネギの方から、

「桜咲さん、すみませんでした」

謝ってきた。

「え？」

どうしてネギが謝るのか刹那には理解できなかった。

そんな刹那の様子には気付かずに、ネギは「明日菜さんにも似た
ようなことをしてしまったんですが」と前置きをして、

「僕って昔からお兄ちゃんの話を始めるとずっと話し続けてなかなか
終わらないんですよ」

だから途中で呆れられちゃうことが結構あるんです。

と、照れ笑いをしながらネギは言った。

それは違います。今のは私がネギ先生の話中に別なこと考えていたのですから、悪いのは私です。

刹那がそう言おうとした時、龍宮から緊急の連絡が入った。

侵入者を発見したと

夜の森にて（後書き）

アスベルの影響を受けたネギの現時点の設定について

- ・この時点でネギは魔法剣士になることを決めている
そのため＜戦いの歌＞、＞瞬動術＜が使える。

近接戦闘もできるがあくまでも詠唱のために距離を稼げる程度（たまに帰って来

たアスベルが接近戦の稽古しかネギにできなかったため）なので
前衛と接近戦を

続けると普通に負ける

- ・アスベルの提案でタカミチにナギの戦い方を聞いたため無詠唱の
＞魔法の矢＜（最

大3本）、＞雷の斧・未完成＜が使える

- ・＞雷の暴風＜、＞白き雷＜は使えない（上記二つの訓練に時間を
割いたため）

- ・くしゃみによる魔力の暴走は強風が起こる程度で武装解除は発生
しない（アスベ
ルの服を脱がしひどい目に合わされたのに改善した）

- ・この時点で「守る」という言葉を多用する……かも
（そのせいかアスベル、ネギ、刹那の仲が良くなりそうです）

- ・デリカシーとかは特にならない

※兄弟の誓いとはT O Gの友情の誓いとすることはなんら変わりあ

りません。アスベ

ルが泣いているネギに「どんなに離れ離れになってもずっと兄弟だ」と、言って 勇気づけるために言い方を変えました。

ちなみにタカミチの渾名は「ホワイト・デビル」です。本編で一回くらいは呼ばせます。だけど未だ出てきたのは名前だけとは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054p/>

守りたいモノ

2011年2月23日17時50分発行